

[13]

氏名	楊 昕 ^{よう きん}
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第30号
学位授与の日付	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	日本明治時期漢語教科書中の“把”字句和 “被”字句：与同時期中国報刊雜誌的比較
論文審査委員	主査教授 沈 国威 副査教授 山崎 直樹 副査教授 玄 幸子 専門審査委員 教授 竹越 孝 (神戸市外国語大学)

論文内容の要旨

楊昕氏の博士学位請求論文：「日本明治時期漢語教科書中の“把”字句和“被”字句：与同時期中国報刊雜誌的比較（和文題目：明治期の中国語教科書における「把」構文と「被」構文：同時代の中国のメディアとの比較を通じて）」は下記のように、本文6章、巻末に参考文献のほか、4つの附録（明治期以前・以後の日本中国語教科書における「把」字文と「被」字文一覧）から構成されており、章の下にはまた節と項が設けられている。

第一章 緒論

第二章 日本漢語教科書と句型教育的研究

第三章 明治早期漢語教科書中の“把”字句与“被”字句

第四章 明治中期漢語教科書中の“把”字句与“被”字句

第五章 明治晚期漢語教科書中の“把”字句与“被”字句

第六章 結論

参考文献

附録

楊昕氏の研究は、明治期に日本で出版された中国語教科書を対象に、教科書の中に用いられている中国語の最も重要な2つの構文：「把」構文と「被」構文を調査整理した上、19世紀初頭から中国本土で出版された新聞や雑誌の中での「把」構文と「被」構文と比較対照し、

構文上の特質と表現意図の両面から、明治時の中国語教科書における「把」構文と「被」構文の特徴を捉えようとするものである。このような作業により、2つの構文の通時的変化のみならず、中国語教育の時代的变化、これらの教科書に反映されている言語教育の手法や目的意識、ないしその至らない点も明らかになることが期待される。

以下、各部分の内容を略述する。

序章では、研究の背景、「把」構文と「被」構文を取り上げる目的・意義、および論文の構成について紹介している。特に本論文の意義を時代的な影響と社会的背景という二つの面から述べた。その上、本研究の問題提起と研究方法について説明している。続いて、「把」構文と「被」構文について文構造の変遷と表現意図の変化を中心に研究史と本論文の問題意識を紹介した。最後に、本研究のオリジナリティを述べている。

第二章は、明治期の中国語教科書の全容とさらなる考察のための理論的枠組みを提示し、明治以前の「把」構文と「被」構文の実際の使用状況を概観している。まず第一節では、明治日本の中国語教育を時代背景、教育機関、教師と学生の構成等の角度から総括した。その上、本研究の対象である明治時代に日本で出版された中国語教科書についてその数量、種類、内容、形式及び使用状況を徹底的に調査し、316点を網羅する文献一覧に整理した。なお、考察の便宜上、教科書を15年刻みで明治前期、明治中期と明治後期に三分した。第二節では、英語と日本語の文型教育の歴史を振り返った。第三節では中国の近世語研究における「把」構文と「被」構文の研究史を研究者と研究成果別に述べている。第四節では、第三章以降の考察の準備として、明治以前に出版された中国語教科書『小孩兒』、『鬧理鬧』、『養兒子』、『官話纂』、『唐話纂要』和『漢語跬歩』などにおける「把」構文と「被」構文についてその文法的特徴や表現意図の傾向性を分析した。さらに、同時代の中国の白話小説『紅樓夢』における「把」構文と「被」構文とも比較し、表現意図の相違を考察した。

第三章では、明治前期の代表的な中国語教科書である『語言自邇集』『官話指南』を取り上げ、2冊の教科書に用いられている「把」構文と「被」構文の文構造と表現意図を19世紀初頭から中国で出版された宣教師編纂の新聞雑誌に現れた同構文の例文と比較対照し、その相違を明らかにした。

第四章では、明治中期の代表的な中国語教科書『英清會話獨案内』、『日漢英語言合璧』、『日清會話』、『支那語自在』などを取り上げ、それぞれ教科書に用いられている「把」構文と「被」構文の文構造と表現意図を19世紀初頭から中国で出版された宣教師編纂の新聞雑誌に現れた同構文の例文と比較対照し、その相違を明らかにした。

第五章では、明治中期の代表的な中国語教科書『燕語啓蒙』、『清語會話案内』、『華語跬歩』、『官話篇』、『京話萃選』、『日清英會話』、『註釋日清語學金針』を取り上げ、上記の教科書に用いられている「把」構文と「被」構文の文構造と表現意図を19世紀初頭から中国で出版された宣教師編纂の新聞雑誌に現れた同構文の例文と比較対照し、その相違を明らかにした。

第三から五章までの考察により、45年という期間において、教科書に使用された「把」構文と「被」構文の文構造と表現意図の変化を時間軸に沿って捉えることができた。楊昕氏の論文では、出現頻度を表す折れ線グラフと例文一覧表を多用し、両文型の変化を明示して

いる。

最後は終章であり、これまでの考察で得られた結論を述べている。中国語の「把」構文と「被」構文は、19世紀の中国本土の新聞雑誌において徐々に変化を見せていたが、日本の中国語教科書では、その変化に追従したのもあれば、変化を捉えきれないものもあることが楊昕氏の論文によって明らかになった。楊昕氏の論文は、明治期の中国語教科書の限界を論じるとともに、今後の教科書編纂にとっても示唆に富むものである。

以上、各章に示したように、楊昕氏の論文は、これまでの研究によく見られる明治期の文献資料に対する書誌学的な考察と異なり、「把」構文と「被」構文の文構造と表現意図の変化に焦点を絞らせ、異言語接触の影響下にある言語の変化と教科書の変遷を一体化して捉えようとする。ユニークなアプローチと言えよう。このような考察により、中国語教科書における「把」構文と「被」構文の変化が明らかになるだけでなく、動詞を中心とした中国語教授法の史的研究にも役に立つものである。

楊昕氏の論文の最大の貢献は、316点もの明治期の中国語教科書における「把」構文と「被」構文を全面的に調査・分析したことである。これらの教科書に反映された教育内容、教授者・学習者の知識構成、中国語教育機関史等の研究成果と総合的に把握することにより近代中国語教育史を解明するのみならず、今後の中国語教育に対しても正しい指針を示してくれるであろう。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：沈国威、玄幸子、山崎直樹）にて審査することになり、楊昕氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、一）必要単位（8単位）を取得済みであり、二）博士論文のテーマと関連する分野で、論文6編（うち査読あり、中国、日本の学会誌掲載論文5編を含む）、三）口頭発表6回（うち国際学会5回、国際院生フォーラム1回）を有し、四）博士論文聴聞会（令和2年8月4日）も終え、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（令和2年9月23日開催）に審査結果を報告し、同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて令和2年10月29日までに楊昕氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（令和2年11月25日開催）において承認された論文審査委員会（主査：沈国威、副査：玄幸子、山崎直樹、学外委員：竹越孝）での審査に入った。

提出された中国語論文（本編238頁、参考文献、付録等を併せた総頁は343頁）は、本報告書「1. 論文内容の要旨」において述べたように、外国語教育という知的活動は、教授者・学習者、教育機関、教育内容、教材教具といった要素から成り立っている。楊昕氏の論文は、特に明治日本で出版された中国語教科書を対象に絞り、教科書に使用された「把」構

文と「被」構文を、同時代の実際の中国語を対極に置き、考察した。参考文献に記されているように中国近世語、中国語教育史、近代文化交流史の研究成果を幅広く取り入れている。巻末の附録に上記の教科書に使用された「把」構文と「被」構文の例文を文構造、表現意図別に整理提示している。

以上のように楊昕氏の論文は、明治期に日本と中国で出版された中国語教科書 316 点について、「把」構文と「被」構文の実情、変遷、特徴を中国本土で出版された新聞雑誌類における使用状況等を比較・考察し、その全容を明らかにしよとする意欲的なものである。

さらに次の3点からも、本学位請求論文は、当該研究分野の空白を埋めるものと判断することができる。

- (1) 「把」構文と「被」構文は、中国語の最も重要な構文である。しかし 19 世紀の言語資料を使って 2 つの構文を詳細に考察するものは少ない。日本で編輯された教科書を分析資料に使い、更に中国本土で出版された新聞雑誌の使用例と比較考察することは非常に意義のあることである。
- (2) 「把」構文と「被」構文は、文の構造や表現意図の上、20 世紀初頭にかけて大きな変容があった。これは中国語以外の言語と接触することによって引き起こされた現象である。その変化過程を丹念に追跡する本論文は、評価に値する。
- (3) 明治期において中国語の教科書は、単語、単文、一問一答形式という前近代的なものから単語、本文、文法事項、練習問題という近代的なものに進化した。このプロセスについて、動詞が関係した「把」構文と「被」構文を中心に考察することは、非常に要を得ると同時にことの真相に迫る可能性が大である。歴史上の教科書に関しては、目標言語に対するビリーフ、習得目的といった学習者側の諸要素をも考察の視野に入れることにより、その時代の外国語教育を教科書によって特徴付けることができ、ひいては今日の日本における中国語教育への示唆が期待できる。

以上により、楊昕氏の論文が、着眼点、対象となる文献資料の豊富さ、ないし研究方法、内容、記述の体裁や論理等全般にわたり、所定の水準に達しており、博士論文としてふさわしいものであると考えられる。